

幼児の遊びの充実化に関する考察

— 4歳児の自由保育場面の観察を通して —

A Study of The Improvement of Infants' Play

— Based on the Observation of Free Playing Scene of 4-year-olds —

次世代教育学部こども発達学科
浅井かおり
ASAI, Kaori
Department of Child Development
Faculty of Education for Future Generations

次世代教育学部こども発達学科
浅井拓久也
ASAI, Takuya
Department of Child Development
Faculty of Education for Future Generations

Abstract : The aim of this study was to examine what scenes lead to the improvement of infants' playing. The study focused on the scenes as the factors of improvement of infants' play. Free playing scenes of 4-year-olds were observed intermittently, and analyzed through the concept of ambivalence between "I" and "We". The result showed that the beginning and end of play were the important factor of the improvement of infants' play. The findings suggest there are the fluctuation of infants' feelings and desire in the start and end of play, and what support, in this point, affects the improvement of playing.

Keywords : start and end of play, 4-year-olds, ambivalence, support of nursery school teachers

I. 研究の背景と目的

幼児にとって遊びとは生活そのものである。それは主体的な直接体験の中で様々なことを身に付け学ぶからである。物に触れ五感や巧緻性を養い、友達とのやりとりから思いやる心や社会性を学び、その他にも思考力や意欲、挑戦心などを無限に総合的に培っていく。

このように幼児にとって遊びは不可欠なものであることから、これまで遊びについては多くの研究がされてきた。関本他（2000）は、日々の保育記録から遊びを捉える視点を探り、保育者の望ましい援助方法を検討し、工藤（2016）は自身の保育実践を振り返り、遊びの充実と保育者の援助との関連性についての検討を行なった。また、秋田他（2001）は、ごっこコーナーにおける遊びの始まりの過程に焦点を当て発達過程を実証的に検証し、飯田他（2010）は遊びの終わり方の年齢別の特徴を示した。このように遊びに関する研究は様々あるが、遊びの始まり、過程、終わりも対象に含めて分析したものではなかった。そこで、遊びそのものや遊びの充実を考える上では、どこに着目するこ

とが幼児の遊びの充実につながっていくのか検討する必要があると思われる。このため本研究では、幼児の遊びを充実させるために遊びのどの場面に着目すべきかを明らかにし、幼児の今の育ちを見極める新たな視点について検討することを目的とした。

II. 調査対象と方法

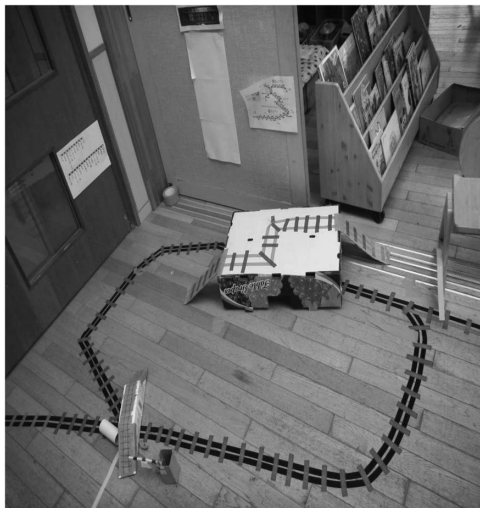
認定こども園4歳児クラスの自由遊びの様子を、2016年5月から10月まで学期ごとに3回ビデオ撮影し記録した。本研究で4歳児に着目したのは、不安や辛さなどの葛藤体験や仲間意識を強めていく過程を観察し、目に見えにくい心の成長をしていく学年の理解を得ることができるからである。また、自由保育に着目するのは幼児の自発性や思いがより表れやすいからである。

記録した保育の場面に対して両義性という概念を用いて分析を行なった。鯨岡（2001）によると両義性とは、「自分自身の『思い通り』を貫き、あくまで自分が自分において充実しようとする方向と、他者に向かい他者に開かれ、他者と繋がろうとする方向との、根

源的な自己矛盾性に引き裂かれているのです。これを人間存在の根源的両義性と呼ぶことにしましょう。」と指摘している。鯨岡の定義をふまえて平野（2014）は、「遊びを中心とする『わたし』の世界と、みんなの活動を中心とする『私たち』の世界をつなぐ場面として片づけを捉え、その双方に価値を置く両義性」と説明している。本研究では鯨岡・平野の両義性の定義にしたがい分析を行なった。

4歳は自分と他者を区別するようになり、自分の思いだけで判断し行動するのではなく、他者から見られる自分や他者の思いも考慮し行動をするようになる月齢である。この発達過程が、鯨岡の言う根源的両義性の概念と平野が論じた「わたし」の世界と「私たち」の世界の分析方法と合致することから、本研究では両義性という概念を用いて分析を行なった。

Ⅲ. 結果と考察



事例1 5月19日



事例2 7月7日



事例3 10月7日

1. 事例1

本事例では、登園後すぐにHは電車コーナーでビニールテープを貼り合わせて作った線路の続きを黙々と行なう。隣で他児が電車を走らせているが会話は無い。HはMが電車を走らせる様子に興味は示すが、話しかけたり一緒に遊ぼうとしたりはしていない。その後Mが踏切を動かしながらHに話しかけると、Hは近くにあった電車を手に取り、踏切に向かい電車を走らせ関わりが始まる。

そして、M「右、左、どっち行きますか？」H「こっち」等やりとりをしながら電車を進める遊びがしばらく続く。

その後、Hは廊下まで電車を走らせるMには付いて行かず、部屋で電車を走らせる。Hは部屋に戻ったMに話しかけるが反応がないと、再びビニールテープを切り線路作りをする。そして製作コーナーに移動し、画用紙で踏切を作り終わるとそれをカバンにしまい遊びを終える。

事例1を両義性の観点から分析すると、遊びの過程場面では、HにMが話しかけそれをHがすぐに受け入れることで「私たち」の世界での遊びがしばらく続いた。その中には電車を線路に走らせ踏切を通るという共通のイメージを持ち「私たち」の世界を楽しむ姿が見られた。

しかしそこに至るまでには時間がかかり、Hの「わたし」の世界と「私たち」の世界で揺れ動く姿は遊びの始まりの場面に見られた。Hは好きな電車コーナーを見つけ自ら遊びを始め、他児が隣で遊んでいてもやりとりは無かったことから始めは「わたし」の世界が強かったことが分かる。しかし同じ電車コーナーで遊んでいる友達に興味が無いわけではなく、「わたし」の世界で線路作りを続けたい、しかし他児のやっても気になる、という間で揺れ動いていた。今回はMの誘いで「私たち」の世界を受け入れたが、その

際、ビニールテープから電車に持ち替え応じる姿から、「私たち」の世界に入るために何が必要か瞬時に考え適応していると言える。

更にHは電車コーナーから廊下へ電車を走らすMには付いて行かずコーナー外へは遊びを広げようとしなかった姿は遊びの終わり場面に見られた。この様子から、好きな空間、安心できる範囲で遊びを楽しむ「わたし」の世界を守りながら遊ぶ姿が伺えた。その後、部屋に戻ったMに話しかけ再び「私たち」の世界に入ろうとするが、自分の誘いに応答が無かったためすぐに1人遊びに戻る姿は、「わたし」「私たち」の世界を瞬時に切り替えていた。

2. 事例2

Hは登園後、今日は何をしようかと部屋をゆっくりと歩き回る。段ボールで作った家で遊ぶ他児の様子を立ち止まって見るが関わろうとはしない。4分半後、最近遊んでいるMが登園する。一気に表情が明るくなり、手招きし家に隠れる。しかしMはまだ母親と離れがたく、Hに「やだ。」と言い母親に抱きつく。それを見たHは家から離れ、1人で製作を始める。Mはまだ母親のことを気にしながらも、Hの製作する様子を見に行く。それに気づいたHは再び段ボールの家に隠れに行き2人の関わりが始まる。

その後、Mの誘いで2人は園庭を探索しながら、虫や猫じゃらし探しをしばらく楽しむ。

途中Mが水飲み場で水を飲むと、Hは「水筒がいい。」と部屋に戻ろうとする。それを見たMは「水筒じゃない方がいい。」と水飲み場で飲むよう促す。Hは歩き出し部屋に戻ろうとするが、2度振り返りMの様子を伺う。Mは遠ざかるHに近づき、「僕のこと嫌い？嫌いでしょ。」と聞く。Hは「水筒飲んでくれるだけだから、すぐ戻ってくる。」と言うが、結局そこに留まる。

事例2の遊びの過程場面では、Mの誘いにより「私たち」の世界に入り、特定の友達と一緒に園庭探索を楽しむ姿が見られた。Hはこの子と遊びたいという願いが叶い、嬉しい表情をしていた。しかしそこに至るまでには今回も時間がかかっていた。

HはMと遊びたいと「私たち」の世界に入り込みたい気持ちが強かった。反対にMは登園したばかりで母親と離れたい気持ちの方が強く、「わたし」の世界を重視していた。しかしHに誘われていること、登園後は母と離れ遊ぶことも理解しているMは「わたし」「私たち」の世界を行き来し葛藤している姿を見せた。

更に、自分の気持ちに添った適切な表現で伝えることができない2人の気持ちが噛み合わず、気持ちが通じ合い一緒に遊ぶまでに時間がかかる姿が遊びの始まり場面に見られた。

またHは「私たち」の世界を終え、水を飲み部屋に戻りたかったが、Mに拒否され、遊びを継続し「私たち」の世界を優先する姿が遊びの終わり場面に見られた。徐々に他者の気持ちが分かるようになり、「わたし」の世界と「私たち」の世界のどちらを優先するか揺れ動く葛藤を見ることが出来た。更にHは「すぐ戻ってくる。」とMを説得しようと「私たち」の世界を維持しつつ、自己の願いも叶えようとする姿が見られた。反対にMは「私たち」の世界を維持したいという気持ちが強く、Hを引き留めるために駆け引きをする姿が見え、両児とも自分の思いを貫きたい思いと他者との関わりの中で葛藤をしていた。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説(2015)では、おおむね4歳は、「自分と他人の区別がつき、自我が形成されていくと、自分以外の人をじっくり見るようになるとともに、見られる自分に気付くといった自意識を持つようになる。自分の気持ちを通そうとする思いと、ときには自分の思ったとおりにいかないという不安や、つらさといった葛藤を経験する」と示されている。まさに今回の遊びの終わり場面での2人のやりとりは、自分の思い通りにはいかない辛さや他者の思いも気にする姿が見られたと言える。

3. 事例3

Hは登園後すぐに、Nから「見てーいっぱい入れるー」と昨日作った製作のお寿司を見せられ、「わさびにからし」と話しかけられる。Hはシール帳にシールを貼ることも忘れ、急いでカバンをしまいお寿司コーナーへ急ぐ。Hは値札、Nはお金、Aはお寿司とそれぞれ作りたい物を作り始める。

その後、Hは保育教諭に「どうやってイカ作る？」と提案し、それを聞いたNも意見を言う。保育教諭は個々の意見を聞きながらイメージを共有する話をして寿司ネタを作る。NとAは些細なことでケンカになりNは違う場所へ遊びに行く。保育教諭から、回転寿司でお寿司が運ばれてくる物とヒントを得て、新幹線の器作りに発展する。作り終えた後、Hはその新幹線の器を積み木の上に走らせしばらく遊ぶ。保育教諭は他児の様子が気になり別の場所へ向かう。

Aは新幹線の器を作り終えた後は本来のお寿司屋さんごっこをしたい気持ちが強く、「ここ、お寿司屋さん

んだよ。」と話す。Hはその言葉を聞きつつも「カンカン。」と踏切をイメージしながら新幹線の器を走らせる。Aはそれを見ながら一緒に新幹線の器を仕方なく走らせ、遊びの温度差が異なる2人の遊びが続く。その後、Aは部屋をうろうろ歩き回る。Hは戻ってきた保育教諭に他児のことを尋ね、すでに登園し園庭で遊んでいることを知ると、お寿司コーナーから離れ園庭へ向かう。

事例3の遊びの過程場面では、保育教諭の遊びのヒントを受け、皆が新幹線の器作りをする共有の意識を持った「私たち」の世界で楽しむ姿が見られた。しかし両義性が強く表れたのは遊びの始まり場面であった。Hは他児からの働きかけにより「私たち」の世界をすぐに受け入れそれぞれがアイデアは出すが、実際に作る物は個々に違うことから、「私たち」の世界を維持しつつも自分の作りたい物を作る「わたし」の世界を充実させる、双方を両立させて遊ぶ姿が見られた。

また、仲立ちとして幼児間のイメージを共有していた保育教諭が不在になると遊びが停滞していった場面は遊びの終わり場面に見られた。更にAは新幹線の器作りから電車ごっこに移行気味のHに対し、本来のお寿司ごっこに戻したい気持ちが強かったが、1人では遊びが成り立たないことも理解し自分の気持ちも上手く説明できないため、Aはお寿司ごっこをしたいという自己欲求を叶えるために、仕方なく「私たち」の世界も持続している姿が見られた。

反対にHは好きな電車遊びも出来たことで満足し自ら遊びを終え園庭に向かった姿から、「私たち」の世界を終え、自分自身の思い通りを貫く「わたし」の世界に戻り、新たな「私たち」の世界を求め遊びを探しに行く姿が遊びの終わり場面で見られた。

IV. 総合考察

4歳児の自由遊びを継続観察し両義性の観点から分析した結果、遊びの過程よりも遊びの始まり及び終わり場面にこそ両義性が強く表れ、その子の遊びに対する想いや仲間意識等の今の育ちを見ることができた。

今回の結果、遊びの過程場面には、「わたし」の世界よりも「私たち」の世界で遊ぶことが強く表れ、特定の友達と同じイメージを持ち遊びを楽しむ姿や一緒に遊びを作り上げていく楽しさを味わいながら協同遊び等をする姿が多く見られた。それに比べ遊びの始まりと終わり場面には、「わたし」の世界と「私たち」

の世界を行き来しながら葛藤する不安定な幼児の姿を多く捉えることができた。その中にこそ、4歳児の個々の遊びに対する想いや葛藤を乗り越えていく姿、仲間意識の変化など今の育ちを見ることができると言える。

これまで保育者は、遊びがどのような過程を辿り発展していくかに重点を置くことが多かった。しかし、遊びの充実を考える上では遊びの過程だけでなく始まりと終わりにも着目することが今の育ちを見極める視点となるのではないだろうか。

特に遊びの終わり場面から捉えることのできる育ちは、時間の制約等で保育者が一斉に片づけを強制する際には見ることのできない姿であろう。保育者の中には、子どもたちが満足し遊びを終えるまで遊びを継続させてあげたいが、1日の生活の流れもあるため片づけを促さざるを得ないと悩む者も多い。そのため1つの策として、1日の流れの見直しや他クラスとの連携等で片づけ時間に柔軟性を持った保育運営をすることが、遊びの終わりにも有意義なものにできると考える。単に遊びの終わりを片づけ目的のために行なうのではなく、幼児の今の育ちを見極める視点として捉えることが重要である。

また、遊びが充実していく過程や要素の1つに、この時期はまだ保育者の存在が必要であることも明らかになった。幼児間のイメージのすり合わせや遊びの停滞を防ぎ発展させるためにも、遊びを見守るだけでなく、時に保育者が遊びに介入し次に繋がる遊びのヒントを提供することも必要である。遊びの充実を考える上で、遊びの始まりと終わり場面をしっかりと観察し、今のその子の育ちを見極めた上での保育者の支援が重要である。

今回はHを中心に分析を行なったため、4歳児全般にみられるものなのか、また生活時間が異なる幼稚園や保育所との違いが次の課題となる。

【引用・参考文献】

- 秋田喜代美・増田時枝（2001）、ごっこコーナーにおける「役」の生成・成立の発達過程、東京大学大学院教育学研究科紀要、第41巻、pp.349-364。
- 平野麻衣子（2014）、片づけ場面における子どもの育ちの過程－両義性に着目して－、保育学研究、第52巻第1号、pp.68-79。
- 飯野祐樹・藤田香・王路曦・竹内誠人・松尾昌親・武内裕明（2010）、幼児の遊びの終わり方に関する研究－3歳・4歳・5歳児クラスの自由遊び場面

- の検討を通じて－, 幼年教育研究年報, 第32巻,
pp.111-116.
- 今井和子・神長美津子 (2003), 「わたしの世界」から
「わたしたちの世界」へ 葛藤を通した子どもたち
の育ち, フレーベル館.
- 厚生労働省 (2008), 保育所保育指針, フレーベル館.
- 工藤ゆかり (2016), 幼児の遊びの充実と保育者の援
助, 帯広大谷短期大学紀要, 第53号, pp.19-25.
- 鯨岡峻・鯨岡和子 (2001), 保育を支える発達心理学
関係発達保育論入門, ミネルヴァ書房.
- 鯨岡峻 (1998) 両義性の発達心理学 ミネルヴァ書
房.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2015), 幼保連携
型認定こども園教育・保育要領解説, フレーベル
館.
- 大葉幸夫・網野武博・増田まゆみ (2008), 平成20年
改定 保育所保育指針解説 保育を創る8つのキー
ワード, フレーベル館.
- 関本道子・星俊子・油井早苗・菅野久美子 (2000),
「幼児の遊びを考える」～遊びをとらえる視点～
遊びを多様な視点でとらえて見直すことで, 一人一
人の幼児の理解に努めるとともに, 望ましい援助の
在り方を探る－, 福島大学教育実践研究紀要, 第38
号, pp.39-46.